

第2節 香川県出土の石臼について

本書に収録した対象地域においては、7点の石臼（ここでは挽き臼のことを指す。）が出土していることが明らかになった。また、香川県下における近年の中・近世遺跡の大規模発掘調査により、同資料の出土例は増加傾向にあることを指摘することができる。

ところが、石臼は粉食文化の中核を担った道具であり、上記のとおり遺跡の発掘調査によっても少なからず出土例をみることができるとはかかわらず、縄文時代の石皿、中・近世の播鉢などに比べると、考古学の研究対象としての認識度は決して高いとは言えない状況であった。それは、同資料が出現時期において、既に完成された形態を示し、時代単位の変化が乏しかったことと、日本列島内部における地域色の差異が小さいために、時代相を分析するためのメルクマールとすることが難しかったことに原因していることが考えられるのである。

しかしながら、大阪府阪南市内において石臼製造のための石切り場遺跡が発掘調査されるなどすることにより、原材料の採掘から、生産、流通、消費の関連性を明らかにすることができる可能性が強調され、考古学的な研究を推進する気運の高揚がみられ始めている。

そこで、本書において石臼の報告を行う機会に、現段階における香川県内の出土資料を集成することにより、それらを歴史的に位置付けるための作業を試みようとするものである。

なお、作業全般にわたり、同志社大学三輪茂雄教授より有益な御教示を受けることができたことを明記しておく。

1 出土石臼について

香川県において石臼は、管見に触れることができるものだけでも、16遺跡から60個体分が出土している。その内訳は丸亀郵便局下層遺跡と大浦浜遺跡？の各1個体を除いて、全て集落遺跡からの出土であり、土坑、溝状遺構、井戸跡等の居住遺構以外に投棄されたか、損壊品を構造物の部材として転用した状態で発見される例が多いことがわかる。

以下に特徴的な資料について詳解する。

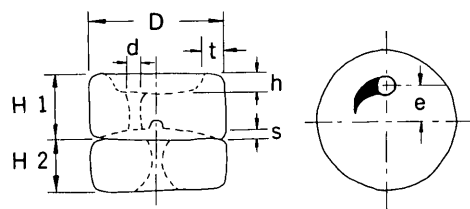
A 1

緻密な粒子の砂岩を原材料として製造されている。供給口が中心軸の位置に貫通しており、芯木の装着箇所を兼ねていることから茶臼であることがわかる。目のパターンは8分画で、1分画は主溝1本と副溝9本により構成されている。1分画中の主・副溝の数は、全資料中最多である。

形態的な特徴は、直径が小さいにもかかわらず、高さが大きい点であるが、その要因としては、茶臼の下臼の周囲には受皿が存在するために、上臼の直径が大きくなると、全体の直径も大きくせざるを得ず、腕を身体から離れた位置まで伸ばして回転させる必要が生じ、作業能率が低下することが考えられるのである。しかしながら、重量が極端に軽くなることは避ける必要があるため、高さを大きくすることにより、調整を行っていることが考えられるのである。

A 2・A 4

両者は同一の遺構内部から採取された上に、作業面の直径とふくみの形態と大きさが等しいことから、組合せ可能な資



第524図 石臼計測位置基準図

第14表 香川県の出土石臼一覧表

単位：mm () は復元数値

番号	道 跡 名 称	所 在 地	遺 構 名 称	時 期	直 径 D	高 H1/H2	上 縁 t/h	ふくみと入口 s/e	分面×溝	供養口 d a×b	石 質	保 存 状 態	特 記 事 項	文 献
A 1	杵田八丁道跡	観音寺市杵田町	SE01	江戸	(192)	124	32	4	8 × 9	25	砂岩	1/4	上	1
A 2	延命道跡	豊中町上高野	SK04	13世紀後半～終末	(200)	(104)	23	9	28	0	凝灰角礫岩	1/4	上	2
A 3	"	"	"	"	(175)	92	25	14	8	0	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A 4	"	"	"	"	(264)	88	—	—	—	—	凝灰角礫岩	1/4	下	"
A 5	"	"	"	"	(276)	44	40	32	—	—	凝灰角礫岩	上縁破片	上	"
A 6	"	"	"	"	(296)	60	24	8	16	—	—	1/4	上	"
A 7	"	"	"	"	(276)	98	—	—	—	—	凝灰角礫岩	1/2	下	"
A 8	中村道跡	普通寺市中村町	E 9 SP19	室町中期	(300)	120	40	30	10	—	凝灰岩	1/4	上	3
A 9	"	"	不詳	不詳	(300)	94	45	15	10	8 × 3	凝灰岩	1/2	上 徳島産?	"
A10	五条道跡	普通寺市原田町	SK02	中世	(300)	144	46	31	10	70	凝灰岩	完存	上	4
A11	京免道跡	普通寺市与北町・他	敷石遺構	江戸以降	(200)	124	60	30	20	—	凝灰岩	1/4	上	5
A12	丸亀郵便局下留道跡	丸亀市大牟町	石組み建物跡	19世紀以降	(400)	133	70	47	5	—	花崗岩	1/2	上 徳島産?	6
A13	郡家原道跡	丸亀市郡家町	SK02	江戸以降	(302)	110	52	24	4	64	凝灰岩	1/2	上	7
A14	"	"	SK03	"	268	120	48	(24)	4	64	凝灰岩	完存	上	"
A15	"	"	SK18	"	(262)	110	44	24	15	—	凝灰岩	1/4	上	"
A16	郡家大林上道跡	"	表面採集	不明	288	127	36	14	18	60	礫石	完存	上	8
A17	"	"	"	不明	(320)	105	0	0	20	—	礫石	1/4	上	"
A18	"	"	SK07	江戸終末	(328)	—	125	—	—	—	礫石	1/4	下	"
A19	郡家田代道跡	"	SB06	18世紀前半～中期	(144)	100	—	—	12	—	凝灰角礫岩	1/2	上	9
A20	"	"	SX03	"	(272)	100	36	16	0	72	凝灰角礫岩	1/2	上	"
A21	"	"	"	"	(136)	72	16	24	0	—	凝灰角礫岩	1/3	上	"
A22	"	"	"	"	(120)	76	—	—	0	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A23	大浦浜道跡?	坂出市蔵石	不詳	不詳	300	152	32	32	20	64	凝灰角礫岩	完存	上	10
A24	下川津道跡	坂出市川津町	SDW01	16世紀	(408)	108	48	48	0	—	凝灰岩	1/4	上	11
A25	木下道跡	琴南町造田	遺物包含層	16世紀	(328)	87	—	—	6 × 4	—	凝灰岩	完存	上	未報告
A26	西村道跡	綾南町陶	S25落ち込み	江戸	(270)	—	40	—	65	—	凝灰角礫岩	1/2	下	12
A27	"	"	N32SE01	"	(132)	100	—	24	—	8 × 3	花崗岩	1/4	上	"
A28	"	"	N23SK01	"	(240)	103	20	24	18	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A29	"	"	S23落ち込み 4	"	(264)	58	—	40	—	—	凝灰角礫岩	1/3	上	"
A30	"	"	N24SD01	"	(260)	125	—	70	—	—	凝灰角礫岩	1/2	上	"
A31	"	"	S25落ち込み 2	"	(285)	105	—	50	—	—	凝灰角礫岩	1/2	上	"
A32	"	"	S25SK43	"	(296)	132	28	20	5	60	凝灰角礫岩	3/4	上	"
A33	"	"	N24SD01	"	(270)	50	—	63	—	—	凝灰角礫岩	1/3	上	"
A34	"	"	S25落ち込み	"	(340)	75	20	30	5	—	凝灰角礫岩	1/12	上	"
A35	"	"	S25落ち込み 3	"	(290)	80	18	15	9	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A36	"	"	S25SD01	"	(270)	100	15	17	10	—	凝灰角礫岩	上縁破片	上	"
A37	"	"	"	"	(290)	165	30	28	0	—	凝灰岩	1/4	上	"
A38	"	"	S25落ち込み 3	"	(290)	63	—	—	14	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A39	"	"	S25落ち込み	"	(290)	95	18	21	2	—	凝灰角礫岩	上縁破片	上	"
A40	"	"	S25第 3 層	"	(250)	(50)	—	—	—	—	凝灰角礫岩	破片	上	"

番号	遺跡名	名称	所在地	遺跡名称	時期	直径 D	高さ H1/H2	上縁 t/h	ふくみと入口 s/e	分面×溝	供給口 a×b	石質	保存状態	特記事項	文献
A41	西村遺跡		綾南町陶	S25落ち込み5	江戸	(250)	88	—	25	不	明	凝灰角礫岩	1/4	上	12
A42	〃	〃	〃	S24ST08	〃	(250)	67	—	5	不	明	凝灰角礫岩	1/4	上	〃
A43	〃	〃	〃	S24SD01	〃	(240)	35	—	—	不	明	凝灰角礫岩	破片	上	〃
A44	〃	〃	〃	N5SK01	〃	296	100	—	32	不	明	凝灰角礫岩	完存	上	13
A45	〃	〃	〃	〃	〃	300	104	—	40	不	明	凝灰角礫岩	完存	上	〃
A46	〃	〃	〃	〃	〃	(200)	96	—	12	—	—	凝灰角礫岩	1/4	上	〃
A47	桑王寺遺跡		高松市榎紙町	SD23	〃	(300)	71	—	24	—	—	凝灰角礫岩	1/2	上	14
A48	東山崎・水田遺跡		高松市東山崎町	C地区第1面SE06	16世紀	(285)	—	81	—	—	(40)	塩基性凝灰角礫岩	1/2	上	15
A49	〃	〃	〃	D地区第1面SK25	16世紀終末～17世紀	(354)	85	—	20	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/4	上	〃
A50	〃	〃	〃	D地区第1面SD01下層	〃	(260)	63	—	—	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/5	上	〃
A51	〃	〃	〃	E地区第1面SK08	16世紀前半～終末	306	118	—	55	—	36×20	塩基性凝灰角礫岩	完存	上	〃
A52	〃	〃	〃	〃	〃	293	108	—	36	—	36×32	塩基性凝灰角礫岩	完存	上	〃
A53	〃	〃	〃	〃	〃	264	—	90	—	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/2	下	〃
A54	〃	〃	〃	E第2面SD05	〃	312	95	—	38	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/8	上	〃
A55	空港跡地遺跡		高松市林町	SDc02	不詳	(350)	95	—	55	25	10	凝灰岩	1/4	上	本書収録
A56	〃	〃	〃	SKc93	江戸	(280)	104	—	40	28	5	—	1/2	上	〃
A57	〃	〃	〃	SKc92	〃	(300)	85	—	—	—	—	凝灰岩	1/2	上	〃
A58	〃	〃	〃	〃	〃	(330)	123	—	50	33	10	—	1/2	上	〃
A59	〃	〃	〃	〃	〃	(300)	62	—	20	—	—	凝灰岩	1/2	上	〃
A60	〃	〃	〃	SEc05	室町後期	(320)	—	88	—	—	8×8	砂岩	1/3	下	〃

(文献)

- 1 片桐孝浩「柞田八丁遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五冊 石田遺跡・長砂古遺跡・柞田八丁遺跡』1988年
- 2 片桐孝浩「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第八冊 延命遺跡」1990年
- 3 真鍋昌宏「中村遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』1987年
- 4 笹川龍一「五条遺跡調査資料」1983年
- 5 磯崎 寛「一般国道319号普通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 京免遺跡」1988年
- 6 東 信男「丸亀郵便局下層遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度』1992年
- 7 真鍋昌宏・岡 敦恵・山下平重「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十三冊 郡家原遺跡」1993年
- 8 廣瀬常雄「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十七冊 郡家大林上遺跡」1995年
- 9 佐藤竜馬「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十四冊 郡家田代遺跡」1996年
- 10 大山真充・真鍋昌宏・他「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V 大浦浜遺跡」1988年
- 11 藤好史郎・西村壽文・大久保徹也「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VII 下川津遺跡」1990年
- 12 廣瀬常雄・林 正弘・他「西村遺跡 III」1982年
- 13 廣瀬常雄・竹下和男・他「西村遺跡 II」1981年
- 14 廣瀬常雄「原道山崎御阪線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・桑王寺遺跡」1994年
- 15 森下友子・蔵本晋司・他「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡」1992年

第15表 香川県の民具石臼一覽表

単位：mm () は復元数値

番 号	資 料 名 称	所 在 地	直 径 D	高 さ H1/H2	上 縁 t/h	ふくみと入口 s/e	分画×溝	供給口 d a×b	石 質	保 存 状 態	特 記 事 項	文 献
B1	普通寺A	普通寺市郷土資料館	215	95	32	約0	8 × 3	40	砂岩	完存	上下 豆腐用	-
B2	" B	"	317	105	52	約0	8 × 4	36	砂岩	完存	上下	-
B3	" C	"	277	138	33	約0	8 × 4	28	安山岩	完存	上下	-
B4	詫 間A	詫間町立民俗資料館	280	140	40	0	8 × 6	38	砂岩	完存	上下	-
B5	" B	"	318	130	33	5	8 × 4	34(80)	凝灰岩	完存	上下	-
B6	" C	"	336	160	50	5	8 × 4	40	花崗岩	完存	上下	-
B7	内 海A	小豆島民俗資料館	275	152	40	約0	8 × 4	46	花崗岩	完存	上下	-
B8	" B	"	245	135	40	5	8 × 4	28	砂岩	完存	上下	-
B9	" C	"	260	106	45	約0	8 × 4	30	凝灰岩	完存	上下	-
B10	" E	"	243	132	43	約0	8 × 3	24	花崗岩	完存	上下	-
B11	" F	"	280	105	40	約0	8 × 4	42	砂岩	完存	上下	-
B12	" G	"	277	168	45	0	8 × 4	44	花崗岩	完存	上下	-
B13	" H	"	266	137	40	0	8 × 3	30	花崗岩	完存	上下	-
B14	" I	"	277	152	47	0	8 × 4	43	花崗岩	完存	上下	-
B15	" J	"	235	140	40	0	8 × 3	34	花崗岩	完存	上下	-
B16	" K	"	260	130	40	0	8 × 3	30	花崗岩	完存	上下	-
B17	" L	"	277	155	40	0	8 × 4	30	花崗岩	完存	上	-
B18	" M	"	273	98	45	約3	8 × 4	40	砂岩	完存	上下 徳島産	-
B19	" N	"	347	-	160	-	8 × 5	-	花崗岩	完存	下	-
B20	" O	"	277	170	-	0	不 明	45	花崗岩	完存	上	-
B21	" P	"	400	-	140	-	不 明	-	凝灰岩	完存	下	-
B22	大 川A	大川町歴史民俗資料館	305	170	45	5	8 × 5	40	砂岩	完存	上下	-
B23	" B	"	215	118	40	0	8 × 3	30	花崗岩	完存	上下 豆腐用	-
B24	" C	"	300	105	-	5	上 8 × 3	35	上 凝灰岩	完存	上下	-
							下 8 × 4		下 砂岩	完存		
B25	観音寺A	観音寺市郷土資料館	330	115	55	0	不 明	50	凝灰岩	完存	上下	-
B26	" B	讃岐習俗参考館	305	130	45	0	8 × 4	40	砂岩	完存	上下	-
B27	豊 浜	豊浜町文化会館分館	307	150	50	5	8 × 4 (小区分あり)	45	砂岩	完存	上下	-
B28	大野原	大野原町郷土民俗資料館	320	165	50	0	8 × 4	35	砂岩	完存	上下	-

料であると考えている。

特に、ふくみの最深部が28mmを測る点は、加工された製品の粒子が急な傾斜を与えなければ排出できないことに起因することが推測できるのであるが、A 4 が受皿を有する形態であることに注目すると、液体状の加工品の製造のために使用されたことを想定することが適当であると考えることができよう。

A 5

上縁の高さが大きいことから、粒子が小さいか、液状の原料の加工を目的としていたことが推測できる。

A 6

相当期間の使用による作業面の消耗のために、直径に比して高さが小さい形態を示している。

A 7

ふくみの形態と大きさがA 6のそれと酷似していることから、両者がセット関係にあったことが推測できる。

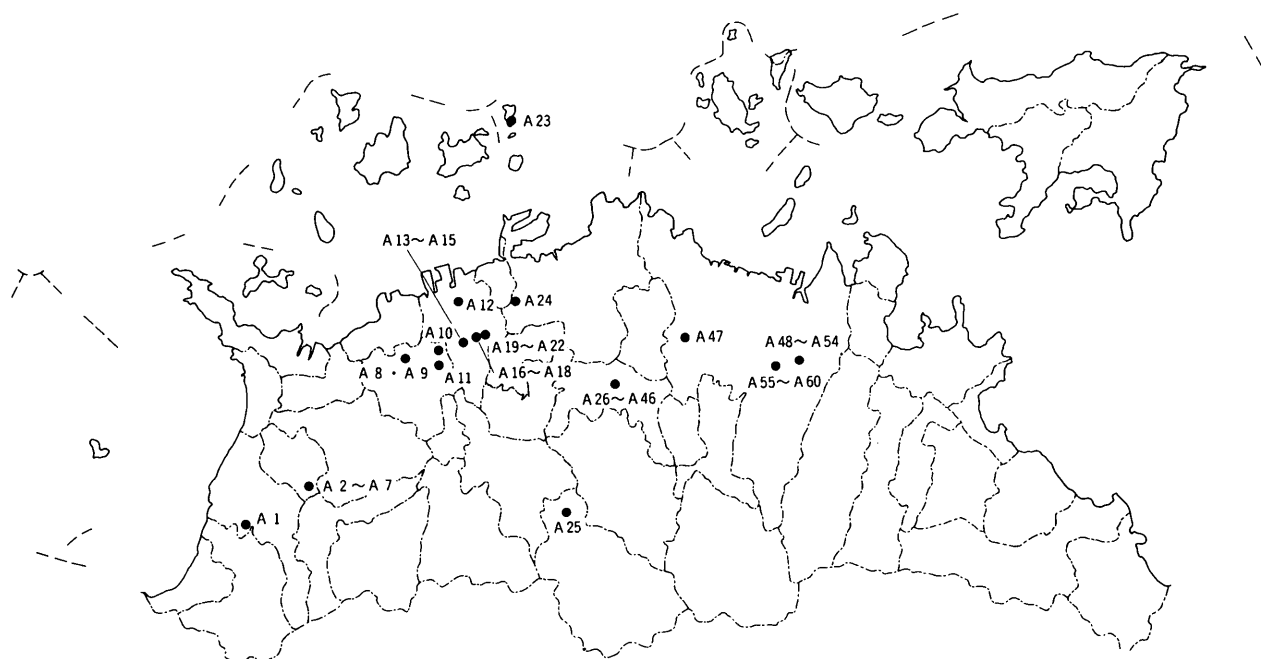
芯棒の装着孔の直径が極めて大きくなっている点については、長時間の使用により内面が磨耗したためであると考えられる。

A 8

完全に芯棒の装着孔の位置で破損していることから、廃棄時において人為的に2分割された可能性が考えられる。

A 10

自然石を集積した不定形な土坑から採取された上臼であり、ほぼ原形を留めている。遺構の性格については判然としないが、採取された遺物が本資料のみであることから、通常的生活廃棄物の廃棄坑として機能したことは想定し難い。したがって、非日常的な精神生活に関連した遺構であると考えることができよう。なお、平成6年度に調査された丸亀市平池南遺跡においては、「ウシ塚」と呼称される石組



第525図 香川県の出土石臼分布図

みの遺構から石臼1点が出土しており、石臼が信仰の対象となり得ることを示唆するものであることから、本資料の意義を考察する上において参考にすることができると考えている。

A12

白色系の緻密な花崗岩を素材とした、精緻な資料である。特に、復元直径が約400mmである点から、人力によって回転することができる大きさとしては最大限度に近い値であることがわかる。

目は若干曲線状を呈しているが、整然とした配列を示していないことから、当初には直線であったものが、「目たて」を繰り返すことにより、曲線化したことが推測できるのである。

A13・A14

ほとんどふくみを有しない形態を呈することから、粒子が細かい原料の加工に使用されていたことを推察することができる。

A23

上面に対して、作業面が傾斜する形態である点については、使用者の癖により一部分に変形が生じた結果であると考えられる。したがって、ふくみの約半分が磨耗のために遺存していない。

A24

作業面に2条の溝が施されているが、これらを目の主溝と判断するならば、両溝が形成する角度が約30°となる。ところが、この角度を根拠とすると主溝の数が12条程度存在する必要が生じるのである。したがって、現在確認されている全ての資料について、8分画が最大であることから、容易に主溝の断定を下すことは避ける必要が考えられる。

A44

ふくみと考えられる凹面部分に、溝状に成形された痕跡が確認できることから、同部分を作業面とする上臼であると推測することができる。ところが、上面に相当する部位に上縁と原料の供給口が存在しないことと、芯棒の装着孔が上面まで貫通している事実については、上記の推測を再考する余地があることを示唆する。

A45

A44同様、上下の方向が判然としない資料である。全体の厚さが一定していないことから、使用者の癖により、一部分が集中的に損耗したことがわかる。

A49

上縁の内側部分に縦方向の加工痕が認められる。

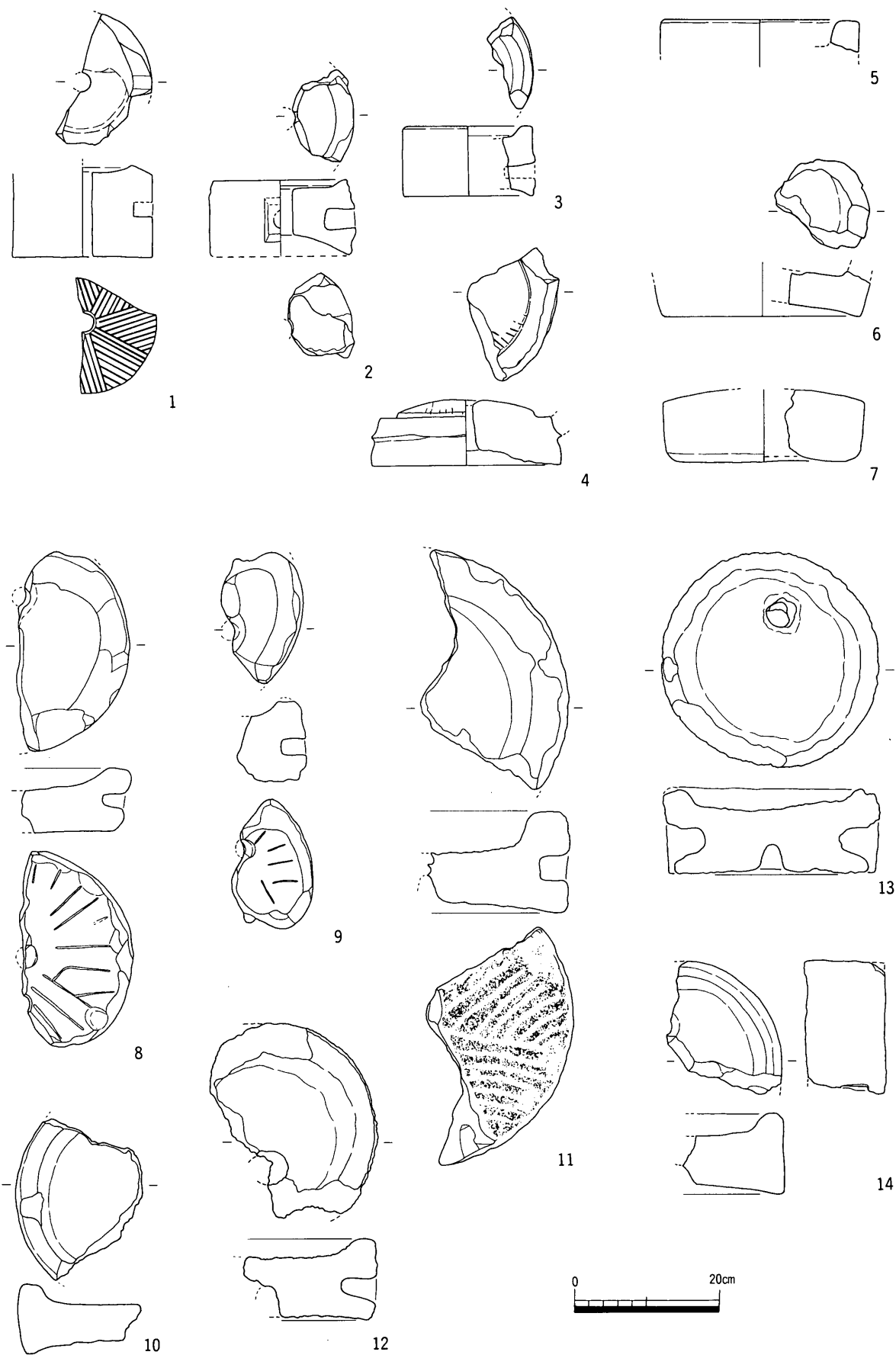
A51・A52

ともに上面に対して作業面が傾斜する形態であり、供給口に近い円周部分が最も磨耗している事実から、時計回りの方向に回転したときに、挽き木が正面手前から約4分の1周した時点において、正面手前部分に最も大きい加重がかかったことが推測できる。

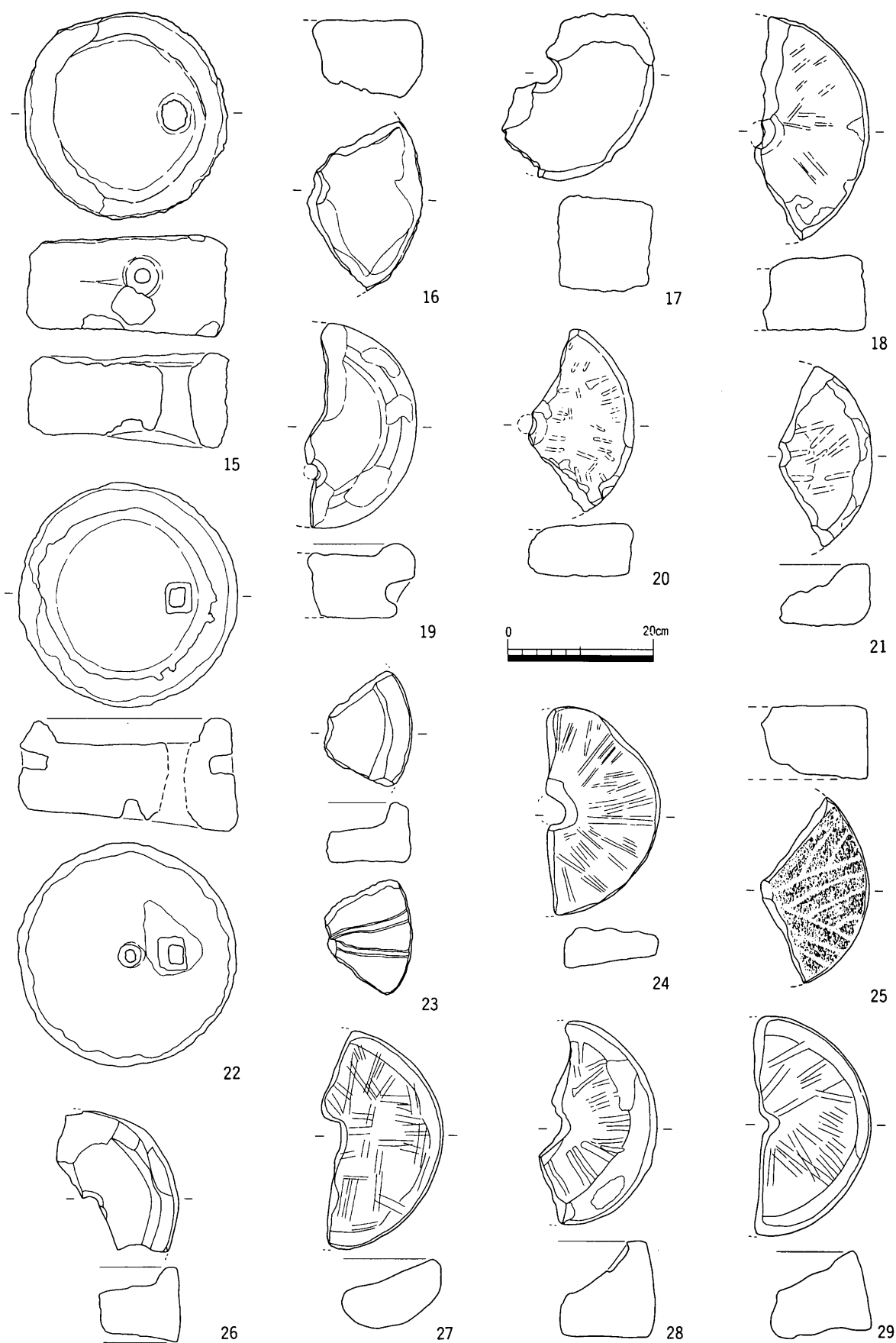
なお、A51は上縁内面部分に縦方向の加工痕を観察することができる。

2 民具石臼について

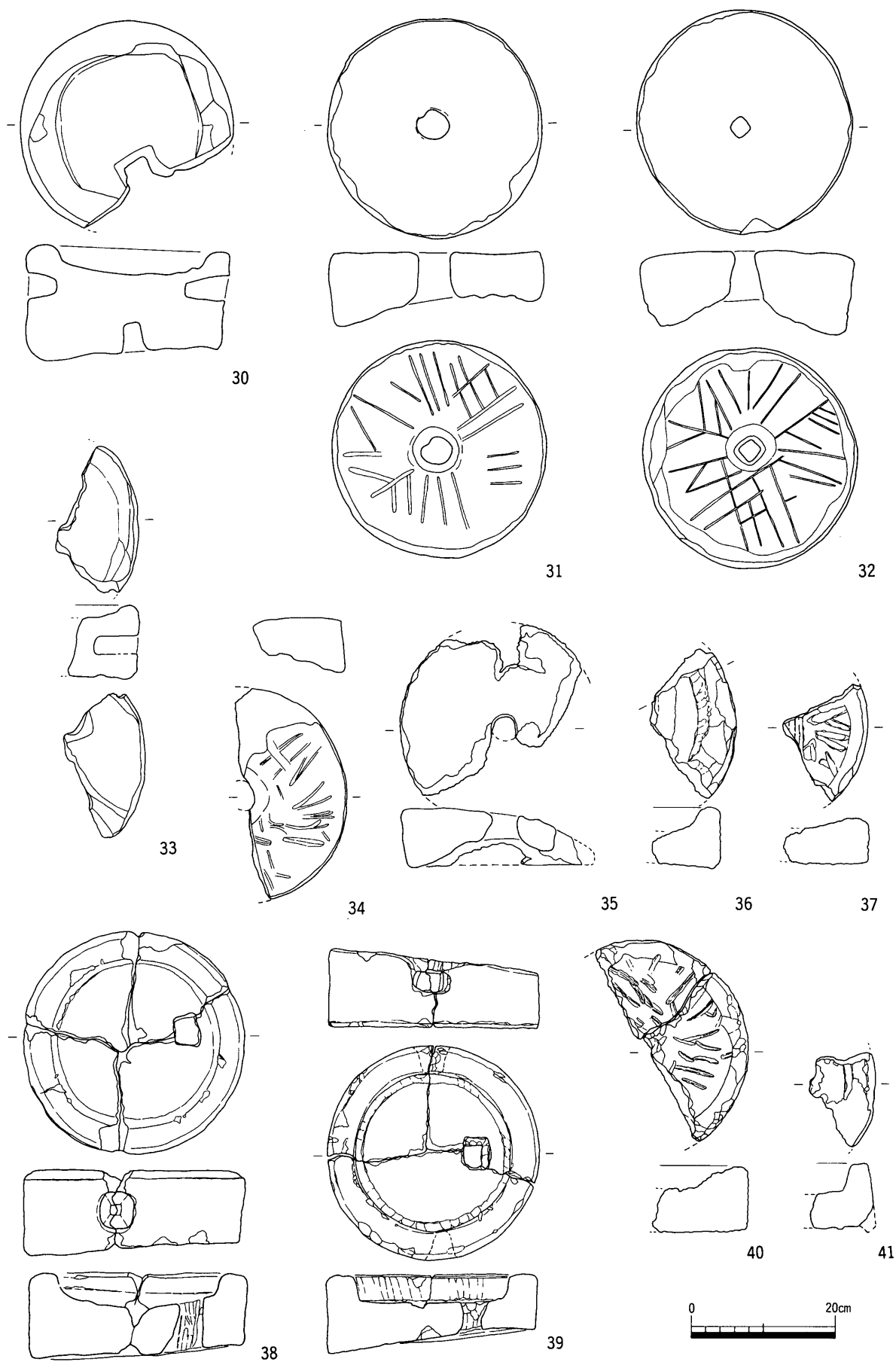
石臼は近年まで日常生活における必需品であったことから、民具資料は香川県内だけでも無限大に近い数が存在することが推察できるのである。しかしながら、限られた時間の中でそれらの全てを観察することは不可能であるために、県下の文化財収蔵機関に保管されている資料についての情報の蒐集を行



第526図 出土石臼実測図(1) (10は掲載文献から複製)



第527図 出土石臼実測図(2) (23, 26は掲載文献から複製)



第528図 出土石白実測図(3)

うことにより、考古資料との比較作業を進めることにする。

B 1

下臼の周囲に受皿を有する形態であり、その存在のために本体の直径が小さくなっている。受皿は液体状の加工品の製造のためには不可欠であると考えられることができるが、伝承によっても豆腐製造のために使用されたことを知り得た。

B 2

目が曲線状を示す点については、「目たて」技術が未熟であったか、あるいは資料の製造地が徳島県祖谷地方であることを示唆するものである。ただし、原材料の石材は砂岩であり、製造地を特定することは困難である。

B 3

ものくばりが円周の約2分の1に相当する距離まで施されている点が特筆できる。

B 4・B 5・B 6

詫間町立民俗資料館において現在も使用されている資料である。小・中学生の体験学習用にきな粉の加工が行われているが、本来の使用目的については明らかではない。

B 8

下臼に受皿と注口を有することから液体状の加工品の製造のために使用されていたことが考えられる。

B 18

目が曲線状を呈することは明らかであり、原材料の石材に吉野川周辺から産出するいわゆる和泉砂岩が用いられていることから、徳島県祖谷地方において製造されたことが推測できる。

B 23・B 24

ともにものくばりが全周する点が特徴である。

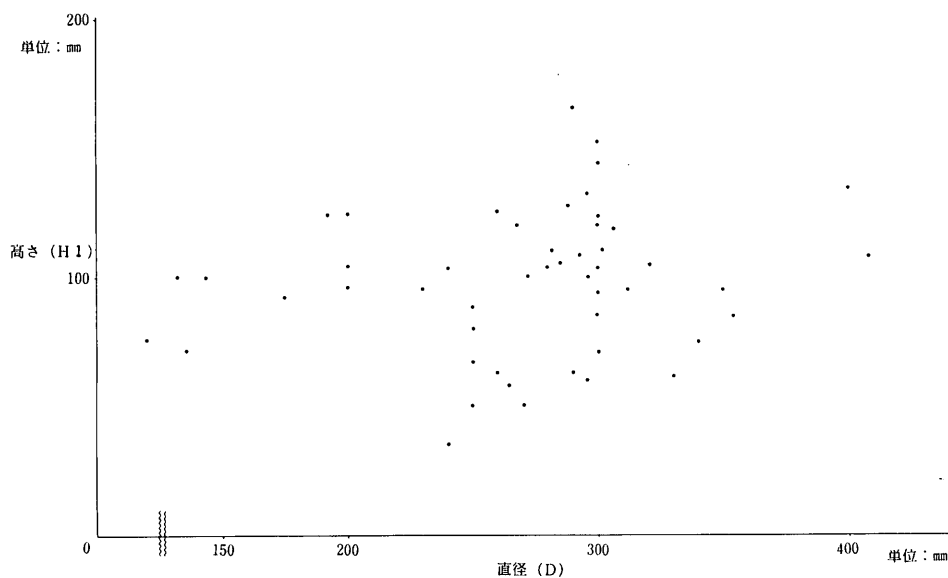
3 問題点と考察

香川県における出土石臼と民具石臼の比較作業を行った結果、以下の事実と問題点が明らかになったことから、今後の課題解決作業のための若干の見通しを立てることにする。

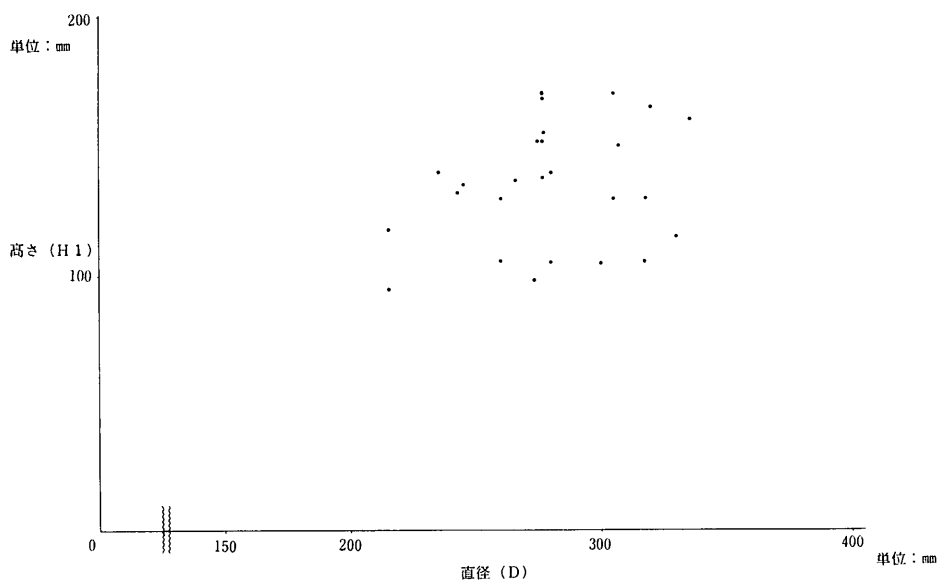
(1) 石材について

考古資料の石材は江戸時代までは凝灰岩が限定的に用いられており、同時代以降にその他の石材の利用が開始される。ところが、民具資料の石材については花崗岩と砂岩が主な原材料であり、凝灰岩の比率は小さくなっている。この要因としては凝灰岩が脆弱な石質であるために石臼の素材としては必ずしも適当でないにもかかわらず、容易に加工することができることから、技術が未熟な段階においても、生産が可能であったためであると考えられることができる。そして、江戸時代以降の技術の向上に伴い、硬質な原材料の使用が開始されることにより、凝灰岩の使用が停滞したことが推測できるのである。

ところで、凝灰岩の中でも凝灰角礫岩と呼称される石材の利用頻度が高いことがわかるが、同石材は通称「豊島（てしま）石」と呼称されるように、小豆島西方の島嶼部を中心とする地域において産出されることが知られている。したがって、同石材を利用した製品の分布についても同地域に濃密に認められることが期待されたのであるが、小豆郡における民具資料の調査結果からはその出現頻度は極めて低いことが判明している。



第529図 上臼の高さと直径の関係グラフ (出土石臼)



第530図 上臼の高さと直径の関係グラフ (民具石臼)

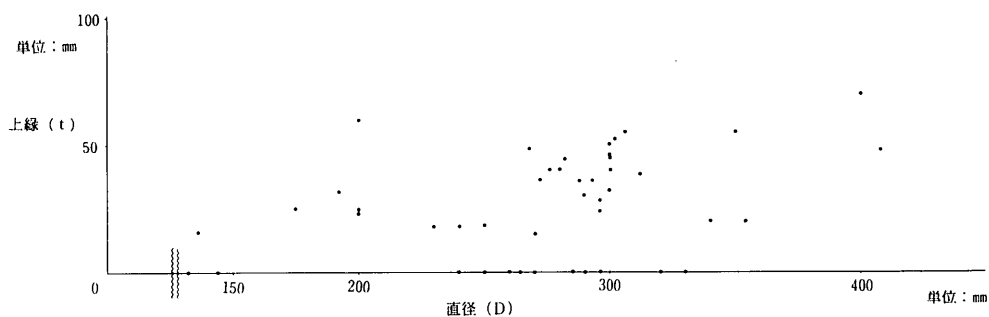
(2) 資料の大きさについて

蒐集できた考古資料の大部分は上臼であるために、民具資料の上臼と比較すると、ともに直径が300mm前後の数値に集中することがわかる。ところが、高さについては考古資料が100mm、民具資料が150mm前後の数値を示すことから、前者が扁平な形態であると言えよう。この事実について、各資料の耐久性に大差がないことを想定し得るならば、江戸時代以前の資料は上臼を薄く製造することが主流であったと考えることができるのである。

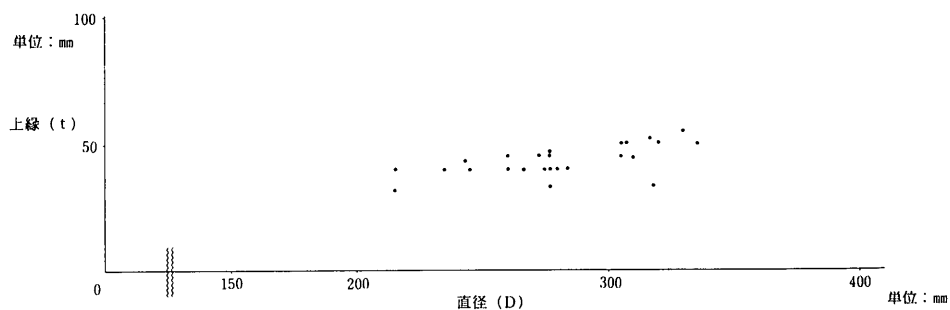
(3) 形態について

石臼に関する研究が不活発な原因として、形態上の時代相と地域相が顕著でないことを指摘し得る点については冒頭において記述したとおりである。しかしながら、詳細な観察を行った結果、形態面における差異が少なからず露見したことから、その原因について検討を加えたい。

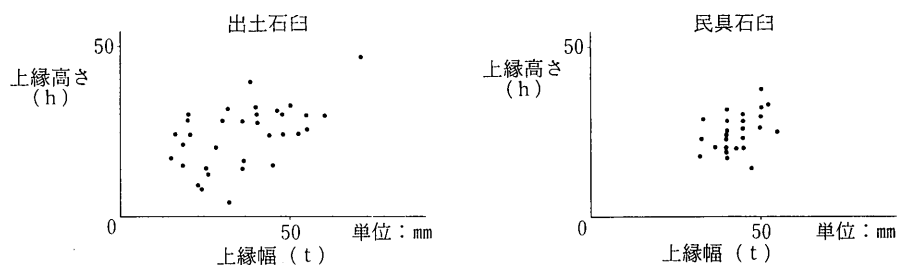
それは考古資料の上縁部に形態差が顕著である点である。すなわち、第533図にみるように、上縁部



第531図 上臼上縁部の高さ と直径の関係グラフ (出土石臼)



第532図 上臼上縁部の高さ と直径の関係グラフ (民具石臼)



第533図 上臼上縁部の高さ と幅の関係グラフ

の高さと幅の比率は民具資料においては一定の領域内に集中する状態が認められるのに対して、考古資料においては、分散する傾向がみられるのである。このことは、近世までの石臼の製造に際しては、製作者の個人差、あるいは用途に対応した形態差が明確であったのに対して、近代以降においては、一定のモデルが設定されていた可能性があることを示唆すると考えている。